

(社)日本原子力学会 標準委員会 発電炉専門部会
第14回 確率論的安全評価分科会 (PISC) 議事録

1. 日時 平成13年6月12日 (火) 13:30~17:00
2. 場所 原子力学会 会議室
3. 出席者 (敬称略)
(出席委員) 平野 (主査), 矢作 (幹事), 加藤, 福田, 成宮, 藤本, 松本, 村松, 森田, 山下 (10名)
(欠席委員) 古田 (副主査), 佐藤, 中井 (3名)
(常時参加者) 倉本, 古橋, 増田 (3名)
(事務局) 太田, 市園

4. 配付資料

- PISC14-1 第13回 確率論的安全評価分科会議事録 (案)
PISC14-2 標準原案に対する標準委員コメント
PISC14-3 標準委員コメント対応意見メモ
-1 事務局 -2 福田委員 -3 村松委員
PISC14-4 標準原案 (改定版)
-1 表紙~目次~2. 定義
-2 3章概要の改定
-3 4. プラントの構成・特性の調査 (附属資料2点)
-4 6. 起因事象の選定 (附属資料1点)
-5 7. 成功基準の設定
-6 9. 緩和系の信頼性評価
-7 10. 従属故障
-8 11. 人間信頼性解析
-9 12. データベースの作成
-10 13. 事故シーケンスの定量化

参考資料

- PISC14-参考1 平成12年度標準委員会事業報告
PISC14-参考1 標準委員会等の開催予定と実績
PISC14-参考1 IAEA安全基準全体体系

5. 議事

議事に先立ち、事務局より、委員13名中代理委員を含め10名が出席しており、本会議が決議に必要な定足数を満たしていることが報告された。

1) 前回議事録の確認

前回議事録について、承認された (PISC14-1)。

2) 中間報告に対する標準委員コメントと対応

事務局より、資料PISC14-2により近藤委員長、喜多尾委員からのコメントが紹介された。これに対する各委員からの意見がPISC14-3-1~3-3で示された。その対応・処置について以下のような方向で対応することとした。

・本標準は規定、指針といったものでなく“手引き”である。しかし、手引きであっても、“ベストのことを要求するという考え方は同じであり、また手引き用の様式というものはないため、「標準作成手引き」に従った様式で記載する。

・“手引き”という位置付けを明確にするため、タイトルに“手引き”を入れる、まえがきにその旨を記載する等を検討する。

・本文の表現には、抽象的な言葉使いを避け、標準として、要求 (推奨) しているのが何か、その達成方法が何かを明確に記載する。

・1つの段落の最後は、指示型の記載にする。

・末尾に置く語句は、「JIS規格票の様式」で示されている語句を使用する (---する, ---しなければならない, ---することが望ましい等)。

・条件が明確になるように記載する。例えば、「---でなければならない。但し,---」, 「---であれば, ---でも良い。」

・“しなければならない”と“する”は、文章の流れの中で適切と思われるものを使用すれば良いが、特に強調したい場合には“しなければならない”を用いる。

・本体には規定する内容を記載するということから、定性的な表現にならざるを得ない場合もあるが、許容する。

3) 標準原案検討

事務局及び各委員より、資料PISC14-4-1~4-10により、分担作成した標準原案 (改定版) の説明があり、審議の

後、2)での対応に加え、以下のような形で再整理することとした。

- 適用範囲に記載の“レベル1 P S A”はここに簡単な説明を付け、定義で詳細に記載する。
- 定義に、“内的事象”、“頂上事象”を追加する。
- 解説3.1の従来の“概要”に当たる部分は、頭に位置付けを数行付けて、解説の中で活かす。
- 文章の組立てについて工夫する。例えば、5-2の「考慮すべき必要があるパラメータとしては、---, ---, ---などに示す項目がある。」を、「---, ---, ---などの項目を考慮して、POS分類を行う。」に変える。
- “出力運転時P S Aと停止時P S Aの境界”、“低出力時の包絡性について”は解説に。
- “解説6.3 起回事象発生頻度の評価例”は、調整して、いずれか正しいものを採用。
- 式番号は、(章)毎に取り、“○. ○”のスタイルとする。
- T H E R Pに記載の数値データは解説に移す(附属書の方が適切かもしれない)。
- 1 3 (章)は、本文、解説を切り分けて記載する。

6. 次回の予定

第16回分科会は、6月25日、または26日午後のいずれかで、後日決定することとした。

以上